

令和 3 年 6 月 定例会 一般質問

通告 5

質問 北方 4 島クルーズと観光広域連合結成について

答弁 クルーズ船のみならず航空機の使用も念頭に入れ関係団体と連携してまいります

18 番 松村 康弘 議員

【質問：松村 康弘 議員】

18 番、松村康弘でございます。

北方 4 島クルーズと観光広域連合の結成について
お尋ねいたします。

一昨年初、共同経済活動の一環として、以前より、
つまりビザなし交流開始以来ずっと、もし実現でき
たら素晴らしいと考えておりました全国募集、中標津空港発着の根室管内並びに北方 4
島クルーズが催行され、全国の応募者から高い評価をいただきました。この企画を推進
した当時の関係者の皆さんに、非常な敬意を覚え、驚嘆の感を強くしたことを記憶いた
しております。

しかしながら、昨年来のコロナ禍によって、昨年はほぼすべての共同経済活動が止ま
ってしまい今日に至っています。その中でも、中標津空港発着の上空からのふるさとの
国後島訪問は、関係者の粘りと企画力の成果であり、コロナ禍以降を構築する貴重な礎
になるものと考えます。そこで改めて、あの北方 4 島クルーズはどのように企画され、
募集主体はどこで収支と参加者の評価はどのようなものであったかお尋ねいたします。

その上で、この秋以降、ワクチン接種後のクルーズ再開の必要性を強く訴える次第で
すが、このプロジェクトは現在どのような状況にあるのでしょうか。釧路空港にピーチ
アビエーションの機体は関空から成田から飛来して、次には女満別空港に飛んでいきま
す。夕暮れ空に武佐岳の彼方、識別灯をきらめかせて、東京方面に飛んでいく機体を眺
める時、そう遠くない時に、釧路空港発の国後択捉行きの機体を見上げる時が来るので
はないかと、現状を強く憂えるものであります。

以前、釧路空港とピーチアビエーションの誘致の企画を書き上げた時に、釧路圏と根
室圏のインバウンドの差があまりに開いていることを痛感させられました。しかしなが
ら、そのインバウンドの差を一挙に縮めることを可能とするのが北方 4 島クルーズであ
ると思います。現在使用可能なエトピリカの蚕棚のような 2 段ベッドは研修施設レベル



のもので、とてもサンセットディナークルーズを楽しむグレードに及んでおりません。浅い根室海峡に適応する双胴型のクルーズ船が複数必要です。これが実現すれば、ビーチの A320 の搭乗率 80%に対応できるインバウンドを一挙に実現できます。

しかしながら、今日これだけの船を配置できる地元企業も観光協会も連盟も見当たりません。では、この企画は見果てぬ夢なのでしょうか。いいえ、そうではありません。今日私たちは、根室北部廃棄物処理広域連合を運営しています。事業主体を 1 市 4 町とする観光のための広域連合を構想するならば、地域住民の参加を議会によって担保できる、広域連合の可能性が見えてまいります。前回の予算議会で換気に関する北欧での体験を述べさせていただきましたが、あの訪欧の際、もう一つ、これまでの私の価値観を根底から覆す体験をいたしました。それはスウェーデン、デンマークの間の港町、ヘルシンガーとヘルシンボリを行き来するフェリーに乗って、サンセットディナークルーズを体験した時です。国境を越えて対岸に渡るにもかかわらずパスポートの提示なしに、ディナーのためにクルーズするという体験、私たちの根室海峡協にも、これを実現することは可能であると考え、1990 年当時の私たちは開陽台から光のモールス信号を発信し、今日のビザなし交流の一つの基を開きました。

その後の中間線に置く置ける洋上交流の情景を思い出すと、必ずや現ロシア島民を巻き込んだ共同経済活動、北方 4 島クルーズは実現可能であり、この企画こそが釧路やオホーツクの追随を許さない独断場を形成できるのだと申し上げておきます。

とりあえずはコロナ禍以降のクルーズにおける体験観光のメニュー開発と、よりグレードの高い船をチャーターする研究からスタートして、ゆくゆくは観光広域連合による自前の船を所有することを目指して、町長としては周辺の自治体に働きかけていかれてはいかがでしょうか。以上の質問でございます。よろしく御答弁お願いいたします。

【答弁：町長】

松村議員御質問の北方 4 島クルーズと観光広域連合の結成について御答弁申し上げます。

令和元年 10 月 27 日から 11 月 3 日までの日程で催行されました北方四島における共同経済活動、観光パイロットツアーにつきましては、観光庁の委託を受けました株式会社ワールド航空サービスが主催し、全国各地から参加者を募り、ツアー客 33 名、同行者 11 名の計 44 名が参加し、うち隣接地域から根室観光連盟会長及び根室振興局副局長の 2 名が参加したところであります。

ツアーの内容につきましては、北海道及び根室管内 1 市 4 町が要望しました中標津空

港の利用、北方四島への渡航に先立つ根室管内 1 市 4 町の訪問が組み込まれ、道外等からのツアー参加者が 10 月 27 日に中標津空港に到着した際には、私と副町長で出迎え歓迎のあいさつ、特産品の配布を行い、続く開陽台まで随行しガイドを行うなど、地元としてのおもてなしをいたしました。その後、根室管内を 3 日かけ周遊した後、10 月 30 日に国後島に上陸、11 月 1 日択捉島に移動しましたが、悪天候により 2 日間の滞在予定が 2 時間に短縮となり、11 月 2 日に根室港に寄港、11 月 3 日中標津空港より帰路についたところであります。

ツアーの収支につきましては、公開されておらず情報がございませんが、ツアー参加者の感想は国後島や択捉島の自然に驚いたところであり、より多くの日本の方々に知ってもらいたい、観光に絡めて北方領土の啓発ができることを実感したとの声があり、約 6 割の方がまた参加したいと答えております。

その後の共同経済活動につきましては、御承知のとおり新型コロナウイルス感染症の影響により、一時的に航空機参やビザなし交流、医療支援事業実施等ともに、日露両国間での協議が滞っている状況であります。コロナ禍収束後におきましても、3 月の施政方針でも述べましたとおり、まず優先すべきは、1956 年の日ソ共同宣言を基礎とした平和条約交渉の再開であり、国の専権事項であることから、北隣協働、北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会として、隣接地域一体となって関係機関と協力し、交渉推進に向け力強く後押しする考えであります。

いずれにしましても、共同経済活動が再開され、新たな観光ツアーの開発ができる状況になった際には、冒頭御報告いたしましたツアー結果を踏まえ、悪天候による島へのアクセスをいかに確保するかが課題であると政府関係者から挙げられており、クルーズ船のみならず、高波の影響を受けない中標津空港を活用した航空機の使用も念頭に入れたツアーの造成など、隣接地域の振興や領土問題の解決に寄与するものとなるよう、国や北海道、北隣協や観光関係団体などとも連携しながら、本町として必要な役割を果たしてまいりたいと考えておりますので、御理解をお願い申し上げます。